アートラボはしもと

アート × 福祉 実践ワークショップ 報告書

平成28年8月～10月

アート × 福祉 実践ワークショップ
主催：アートラボはしもと
共催：認定 NPO 法人芸術資源開発機構（ARDA）
後援：アートラボはしもと事業推進協議会（女子美術大学・桜美林大学・多摩美術大学・東京造形大学・相模原市）
協力：社会福祉法人ワゲン福祉会 特別養護老人ホーム 相陽台ホーム
医療法人社団 哺育会 さがみリハビリテーション病院
桜美林大学
女子美術大学

アート × 福祉実践ワークショップについて

アート × 福祉実践ワークショップは、高齢者へのアウトリーチと学生育成を目的に、アートラボはしもとが主催する全８回の実践ワークショップである。アートや福祉を学んでいたり興味を持つ学生たちが集まり、高齢者福祉施設で行うアートワークショップを企画し、実施した。

これまで当館では高齢者へのアウトリーチの実績が少なく、その企画運営において専門的な助言が必要であったため、高齢者を対象としたアートワークショップを先駆的に行ってきた認定 NPO 法人芸術資源開発機構（ARDA）に、全８回を通して企画指導をいただいた。また、各回様々な専門の講師に講義をいただき、ワークショップを企画する前段階となる“アートに何ができるのか”“何のために行うのか”“何を大切にしたらよいのか”などについて考える場を設けた。ワークショップの舞台である相陽台ホームの職員の方、ARDA のコーディネーター・コミュニケーターの方など様々な方に関わっていただき、学生を主体としながらも多くの方との協働で企画をつくりあげていった。

アート × 福祉実践ワークショップ流れ

START

8/21（日）

1 “アート × 高齢者”の取り組み紹介・高齢者への理解　アートラボはしもと 13:00 ～ 17:00
★ＡＲＤＡ活動について「アーティストと高齢者が出会う時」
★相陽台ホーム　介護福祉士・スタッフによる講義
★さがみリハビリテーション病院　言語聴覚士・作業療法士による講義

8/26（金）

2 施設見学・“アート × 福祉”の取り組み紹介　相陽台ホーム アートラボはしもと 10:00 ～ 17:00
★相陽台ホームの見学・高齢者とのコミュニケーション体験
★女子美術大学　鈴木理恵子准教授による講義・アートワーク体験

9/4（日）

3 アートワーク体験・アイデアだし　アートラボはしもと 13:00 ～ 17:00
★桜美林大学　福田潤教授による講義・アートワーク体験
★アートワークショップのアイデアだし

9/11（日）

4 アーティスト体験談・アートワークショップの企画指導　アートラボはしもと 13:00 ～ 17:00
★アーティスト藤原ゆみこ氏による高齢者施設におけるアート活動の紹介
★高齢者に向けたアートワークショップにおける企画のポイントについての指導

9/22（祝・木）

5 アートワークショップのロールプレイ・ブラッシュアップ　アートラボはしもと 13:00 ～ 17:00
★施設スタッフを対象としたロールプレイ実施
★企画ブラッシュアップ

9/25（日）

6 最終プレゼンテーション　アートラボはしもと 13:00 ～ 17:00
★相陽台ホームスタッフ・並河恵美子氏（ARDA）に向けてプレゼンテーション

10/2（日）

7 準備　アートラボはしもと 13:00 ～ 17:00
★当日に向けての準備

10/8（土）

8 アートワークショップの実施　相陽台ホーム 13:00 ～ 17:00
★相陽台ホームにおいて入所者・通所者を対象としたアートワークショップを実施

GOAL

第1回 “アート × 高齢者”の取り組み紹介・高齢者への理解

ここではこのワークショップに関わる人たちとの顔合わせや様々な立場の人たちとの交流を目的とした。各講師に講義いただき、参加者全員でこれに対する感想や質問疑問を共有し、意見交換をする場を設けた。

■「アーティストと高齢者が出会うとき」ARDA 並河恵美子

■「高齢者の特性理解からその人らしいアートを考える」
さがみリハビリテーション病院 作業療法士 佐藤隼・言語聴覚士 今井淑恵

■「相陽台ホーム施設紹介」 相陽台ホーム 施設長 常盤拓司・介護福祉士 篠崎珠恵

第1回目では、相陽台ホームの方々、アートデリバリーを行っているNPO法人ARDAの方々、そしてワークショップを企画していく私たち学生が集まった。

相陽台ホームの方には、施設の様子や施設利用者の病気や症状について教えていただき、ARDAの方々には今まで行ってきたワークショップの映像を見ながら現場の話をいただいた。また、さがみリハビリテーション病院の方による講義では、大まかな症状については知っているつもりであった病気について、初めて医学的な観点からお話を聞き、改めて高齢者について知ることができたと思う。そして、アーティストの方々がどのように高齢者の方々と接しているのか、どのようにワークショップを行ってきたのか、視覚的に情報を得ることによって、私たちが目指す方向性が見えたような気がした。しかし、こんなにクオリティーの高いワークショップを作りあげることは私たちに果たしてできるのだろうかと、少し不安にもなった一日だった。（参加学生：山川）

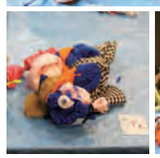
第2回 施設見学・“アート × 福祉”の取り組み紹介

前半は、ワークショップの対象となる高齢者の方々が普段どのような様子で活動をされているかを知るため、施設を見学し、レクリエーションに参加した。後半は“福祉”という広い分野でのアート活動について、女子美術大学の鈴木理恵子教授に講義をいただいた。

■ 相陽台ホーム施設見学・レクリエーション体験

この日は初めて、ワークショップを実施する施設の相陽台ホームを見学し、当日の会場の大まかな把握や、施設の雰囲気を確認した。見学をしていると職員の方々の元気なご挨拶や、施設利用者の明るい笑顔、楽しそうに周りとおしゃべりをする姿から施設の温かさがすぐに伝わってくる。施設では、体操やレクリエーション、縫い物、折り紙など各部屋で様々な取り組みが行われており、施設利用者が個人やグループで作った絵画作品や書道作品が施設内に飾られ、華やかな雰囲気だった。

短い時間だったが、今回施設を直接見学することで、知らなかった 福祉施設での取り組みの発見や、施設利用者に対しての職員の方々の関わり方など学ぶ事もできた。そして福祉施設への理解も深まり、ワークショップの企画を進めていく良いきっかけになった。（参加学生：島田）



■「アートってつかえるの？」女子美術大学 准教授 鈴木 理恵子

午後からは鈴木理恵子先生のお話を拝聴した。アートが社会をどのように変えていけるかという視点での研究・実践のお話では、高齢者だけではない様々な方への取り組みを知ることができた。また、“〈アートをすること〉と〈遊ぶこと〉とは心理学的に共通する”という考え方を知り、これも新しい発見となった。

さらに、実際に重症心身障がい児施設で行われた、布切れを使って生きものをつくるというワークショップを体験した。障がい児や高齢者の体の不自由さを体験するため、片方の手に軍手を2重にして着用した。そして、それぞれが思い思いの布やモールを手に取り、組み合わせては他者のものと交換し、さらにアレンジを加えていくというものだ。学生の立場では 2 重の軍手もなんのその、普段と変わらぬ感覚で布いじりが出来た。逆に言えば、思い通りに手が動かせない人の立場に立つことの難しさを思い知った。

複数の人と同じテーブルを囲み、同じ作品に手を加え、作品の工夫されているところなどを賞賛し合う事によって、他者とのつながりが生まれ、自己肯定感が湧き上がる。メンバーは今回の企画に大きな成果が待っている事を自覚し、高揚感と緊張感を持ち帰った。（参加学生：白井）

第3回 アートワーク体験・アイデアだし

社会福祉の分野から高齢者福祉施設でアートワークをされている桜美林大学の福田潤教授にご講義いただき、“福祉とは何か？”を考え、実際に高齢者に向けて行われているワークを体験した。

■「高齢者がしあわせな社会」桜美林大学 教授 福田潤

第 3 回目のワークでは、クレヨンを使って形のない表現をした。何かを描くとき丸や三角、四角などの形を意識して表現をすることが多い。しかし、このワークでは何かの形を描くのではなく、クレヨンを持ち、自由に手を動かすのだ。その時、一つだけ指定がある。「楽しいことを想像しながら手を動かす」ことである。すると、どうだろうか、みんなの描く線が丸みを帯びた線となって画用紙に現れた。このことから知識に差があれど、私たちは同じような表現をすることがわかる。「どんなことが楽しいか」という違いはあっても、「楽しい」という感覚の表現に違いはないのである。となると、表現した結果は似通ったものになるので意味はなく、表現をしたという過程が大事なのではないだろうか。つまり、私たちは「何ができるか」にこだわるのではなく、どのように「楽しんでもらうのか」にこだわる必要があるのだろう。過程の大切さを学んだワークであったと強く感じる。（参加学生：芳賀）

第4回 アーティスト体験談・アートワークショップの企画指導

高齢者福祉施設で 15 年以上にわたりアートワークショップをされている藤原ゆみこ氏から、その取り組みについてご紹介いただき、さらに学生の企画についてご指導をいただいた。プログラムで何を重視し、どのように組み立てていくのか、体験に基づいた助言をいただきながら企画を詰めていった。

■「高齢者福祉施設におけるアートワークショップ」アーティスト 藤原ゆみこ

第 4 回目は、高齢者介護施設で長年アートを実践していらっしゃる藤原ゆみこさんにお話をうかがい、企画について指導をいただいた。自身の身近な方の看取り体験をきっかけに高齢者対象のアートワークショップを手がけるようになった藤原さんは、高齢者に対して並々ならぬ想いがあり、その口から語られる一言一言に重みがあった。現状、高齢者施設ではまだまだアートの可能性が認知されておらず、作業的に余暇活動が行われている現場が多い中で、長年続けていかれるというのは大変なことだと思う。その何度も試行錯誤を重ねた中から得られた、高齢者ならではのアプローチや配慮は、高齢者と真剣に向き合ってきたからこそ生まれたものであり、表現することの本質を改めて考えさせられるようなものだと感じた。高齢者について知り始めたばかりの私たちだったが、高齢者にアートを提供する意味を改めて考える有意義な時間となった。（参加学生：井上）

第5回 第6回 第7回 アートワークショップのロールプレイ・ブラッシュアップ 最終プレゼンテーション 準備

本番のワークショップと同様に、相陽台ホームの職員の方に体験してもらい、ブラッシュアップのための意見をいただいた。さらに ARDA のコーディネーターやコミュニケーターの方にも体験していただき、細かい手順や進行の言葉がけなどの確認を行い、準備を整えていった。

第 4 回で当日の具体的な流れが決まり、話がまとまった。あとは練習と細かい修正を重ね、道具を用意するだけである。5回目は相陽台ホームの方々・6回目はARDAの方々に向けてのロールプレイだった。細部の修正やプラス要素を入れながら、制作そのものは着実に、作る側も支援する側も楽しめる、といえるものになっていた。

7 回目には寸劇もほぼ完成となり、制作で使う道具も必要数が揃った。全体的な流れもある程度頭に叩き込まれ、ワークショップのプランは、ようやく一通りの形が出来上がった。とは言え、全員が同様に未だに高齢者との実際のコミュニケーションについて不安を抱いていたことも事実である。（参加学生：白井）

第8回 アートワークショップの実施

当初の予定を変更し、当日の午前中も施設の別室を借り、リハーサルや打ち合わせを行った。午後は施設職員の方にも色々と助けていただきながらの準備・実施となった。通所・入所各10人ずつ計20人の参加予定であったが、当日飛び入り参加もあり、計28人の参加者とのワークショップとなった。また、施設職員の方は、生活相談員・介護支援専門員・看護師・管理栄養士・介護職員など約15人が入れ替わりながら参加者の補助として加わった。

秋色ランチョンマット

2016年
10月8日(土)
14:00 ～ 15:00
相陽台ホーム
参加者28人
(通所10人・入所18人)

内容とねらい

“秋”をテーマに参加者それぞれの秋に想いを馳せ、それを表現することを目的とした。約A3サイズのランチョンマット（手作り牛乳パック紙）に秋の素材を使って絵の具でスタンプし表現していく。

テーマは、参加者の思い出や今の生活からイメージが膨らませやすく、学生も一緒に会話ができるものということから“秋”を選定した。

また、学生たちが直接参加者と関わるのはわずか1時間となるが、この体験を何度も思い出してほしいという想いから、日常生活で使用できるランチョンマットの形にした。

牛乳パック紙の作り方

下準備

①牛乳パックは2～3日ほど水の中に浸し、ふやけてきたら表面に施されているポリエチレンのフィルターを両面剥がす。

②フィルターを剥がしたら、3cm位の大きさにちぎる。

③さらに、ミキサーにかけてドロドロになるまで粉砕する。ここまででようやく原料となるパルプが完成。

制作

①バケットに水をひき、パルプと化学のりを加える。

②材料を十分に混ぜ合わせたら、簀桁（すけた）という竹ひご、萱ひごを使って編まれた用具の中に流し入れる。

③簀桁の掛け金をはずしたら、裏返して、平らな板の上で、簀から外す。

学生コメント－制作に寄せて

制作において、重要視したのは実際に手にした時の素材の存在感である。触れた瞬間、ある程度厚みを感じた方が「これからこの和紙を使って制作する」という意識を参加者に向けることができると考えた。

紙自体への染色も試作の段階で思い浮かんだが、染色された紙の色が参加者を揺さぶらせ、イメージの妨げになる可能性があると思い、今回はあえて控えることにした。（参加学生：千葉）

ワークショップの流れ

1、挨拶・学生自己紹介
2、寸劇（ランチョンマットの説明）
3、自分の秋をみつけよう（テーマ説明）
4、ウォーミングアップ（歌と振り付け）
5、制作
6、鑑賞

材料・道具

和紙（手作り牛乳パック紙）
秋の素材（落ち葉・松ぼっくり・どんぐり等）
絵の具（赤・青・黄）
パレット
描画スポンジ（雪だるま型）
手拭きタオル
寸劇小道具（ちゃぶ台・衣装・かつら等）
記録用カメラ

寸劇

導入で取り入れた寸劇の台本づくりから実演までを行った

劇の内容にこだわるべきではなかったのかもしれない。私が大きな声で役を演じても、言葉で相手に伝わっている感覚が少なかった。一言一言を意識して発すれば、文のつながりがあやふやになり、視線が離れていってしまう。失敗であったとまでは言わない、非常に良い経験をさせてもらった。人前に立つのは慣れているが、高齢者の方たちの前に立った経験はなかった。その点が強く出てしまったのだろう。今回の経験を活かし「次回こそは」と強い想いを秘めることになった、寸劇であった。（参加学生：芳賀）

ファシリテーター

ワークショップ全体の進行を担当し、鑑賞の場面では各作品へコメントした

ワークショップ当日の現場の雰囲気が直前まで掴めなかったが、いざファシリテーターとして現場に立ってみると、参加者の方々からは緊張で凝り固まっている様子の私たちを、温かく受け入れようとしてくれているような雰囲気を最初に感じた。そのため、マイクを持ちながら程良い緊張感の中で挑むことができた。

制作中は各班の様子を見ながら全体の進行を促していたため、参加者が徐々に創作活動に対して積極的になっていく様子を肌で感じ取ることができた。また、制作過程で身の上話を交えながら親交を深めることができたため、鑑賞会の時には会話の中で登場してきた内容などを入れながら、聞く側と講評される側、なるべく双方が飽きないように考慮しながら司会を務めた。（参加学生：千葉）

コミュニケーター

参加者の制作補助や個々の対応など参加者とのコミュニケーションを行った

施設の方が事前に空気を温めてくださり、皆さん温かく私たちを迎えてくださった。素材を前にして企画が始まる前から「何が始まるのかしら」とワクワクされており、制作の始めはなかなか素材に手が出ない方も多かったものの、一人ひとりお声がけするとそれぞれのペースでそれぞれの楽しみ方を見つけて制作されていた。（参加学生：井上）

私が一番苦戦したのは、参加者とのコミュニケーションの取り方である。ボディータッチをしながら大きな声でゆっくりと、というのは分かっていたが、いざ現場に入ってみると感覚を掴むまでに時間がかかった。（参加学生：山川）

当日私は、全体を意識した対応にまで頭が回らなかったのに対し、職員の方は常に全体を見て、参加者に寄り添い円滑に制作を進めていた。また、手順の説明の際も、それぞれ個人にあった説明の仕方をしていた。一人ひとりを意識するだけではなく、全体を見て行動している職員の方の姿から多くの事を学べた。（参加学生：島田）

記録

ワークショップ全体を俯瞰し、参加者やスタッフの動きなどを記録した

当日のビデオ・写真と記録係の書き留めた記録のみが、ワークショップ本番についての手元に残るわずかな情報となる。そのため様々な声を聞き逃さぬよう、気を引き締めて挑んだ。参加者や学生の生の声から素直な感情を感じ、アートワークショップの持つ力を再認識する機会となった。（参加学生：鬼木）